

菅沼正子

～すてきなあなたへ～

## 今も輝くスター55 (6)

～ジョン・ウェイン～

星条旗そのもののミスター・アメリカ

愛称はデューク

ハンサムな容貌、193 ㍉、91 ㍏。そのたくましい体をゆすって歩き、荒野じゅうに聞こえるような大きな声のジョン・ウェイン。まさにアメリカの栄光とともに生きた男の中の男。50 年に及ぶ活動期間で、およそ 200 本（製作・監督・舞台などを含めるとこれ以上）もの作品を残している。1907 年 5 月 26 日、アイオワ州ウィンターセット生まれ。両親ともアイerland系で、父親は薬剤師。一家は彼が 5 歳の時カリフォルニア州グレンデールに転居。彼のペットはアデルテリア。“リトル・デューク”と名付けたその愛犬を連れてのハイスクール通い。そのためみんなが彼のことをデュークと呼んでいたらしい。彼はデュークの愛称を好んでいて、生涯その愛称を拒まなかった。愛称とはいえデュークと呼ばれるその愛らしさ、彼の心根の優しさが分かる。成績の良かったデュークは海軍兵学校を志願するも推薦漏のため南カリフォルニア大学 (USC) へ入学。フットボールで頭角を現すが怪我で断念。その後さまざまなアルバイトをしたその一つが、フォックス撮影所での小道具係。そこでジョン・フォード監督に見出され、29 年映画界入り。

### J・フォード監督と「駅馬車」

映画界入りしてまもなく、のちに大監督になるラオール・ウォルシュの「ビッグ・トレイル」(30) に主演したものの、フォード監督からは全然お声がかからない。親分肌の監督は、私生活ではジョン・ウェインを子分のようにかわいがって、フォード一家への出入りを許していたのに。それでもウェインは他の監督作品で実績を重ねていくが、B 級西部劇のヒーロー役ばかり。いつの間にか 30 歳を過ぎていた。そんなウツウツたる日々のある日、フォード監督からの「駅馬車」(39) への大抜擢になったのである。フォード監督はなぜ 10 年もほったらかしにしていたのか。たぶん私の思うには、B 級西部劇で頑張るウェインを見ながら、彼の真の魅力を探り続け、いつか自分が作る西部劇で彼をホンモノのスターにしてやろうと考えていたその機会が「駅馬車」でついにやってきたのだろう。

こうしてウェインは、荒野を走る駅馬車に途中で乗り込む若いガンマンに扮し、一躍メジ

ャー映画のスターに躍り出ることになる。その後もフォード監督は「アパッチ砦」(48「三人の名付親」(48)「黄色いリボン」(49)「リオ・グランデの砦」(50)「搜索者」(56)「アラモ」(60)といった秀作西部劇に次々と彼を起用して、アメリカ映画史に残る大スターに育て上げたのである。それからのウェインは人気スター・ベスト 10 に毎年顔を出すようになる。48 年は 33 位だったのが、49 年は 4 位、以後 58 年を除き、74 年まで連続トップ・テン入り。しかも 1 位は 4 回も。興行主が選ぶ<ドル箱スターベスト・テン>では 24 年連続ドル箱スター番付入り。<すごいスター>の一語に尽きる。

馬が合うジョン・ウェインとジョン・フォード監督。男性的でありながら詩情と郷愁にあふれた監督とスター。祖国愛、人生観、やさしさ、などなど 2 人は似た者同士なのだろうと私は思う。

### 視線はいつも前向き

ウェインの肩書は俳優だけではなく、映画プロデューサーでもあり、映画監督でもある。初めてのプロデュース作品は、パラマウントのプロデューサー、ロバート・フェローズから 70 万ドルの出資を受けて製作した「拳銃の町」(44)。牧場の乗っ取りを企む悪党と闘うガンマンの活躍を描く西部劇で、もちろん主演もやっている。興行収入 400 万ドル上げたというから立派。気をよくしたウェインは、そのフェローズと組んでハリウッドで最初の独立プロダクションを設立 (52)、その後フェローズと別れ、バトジャック・プロと改称したプロダクションで、「アラモ」(60)「グリーン・ベレー」(68) などの大作を製作・監督・主演していく。

「アラモ」の失敗は大きな痛手だった。1835 年、当時メキシコ領だったテキサスは（そうだったの？と、いまさらながらビックリ！）、メキシコからの独立を叫び、わずか 155 人で 4000 人のメキシコ軍に立ち向かったテキサスの開拓者たちの悲劇を描いている。この作品は、スペクタクル作品として楽しめ、ディミトリ・ティオムキンのテーマ音楽も大ヒットして、興行的にはまずまずの成績だったが、製作費が余りにも懸かりすぎた。そのためウェインは、自分の財産をはたいたうえ莫大な借金まで背負い込み、破産寸前の状態に落ちいったのである。ところが幸いこの作品はアカデミー賞で作品賞を含む 7 部門でノミネートされ、ネームバリューは上がったが、残念ながら受賞は音響部門のみという惨状。でもウェインには製作者として、監督として、ある程度の手ごたえを感じたに違いない。

「アラモ」以降、メジャー各社からのオファーには質を選ばず出るようになったのは、借財返済ためだったのだろう。

### 試練を乗り越えアカデミー賞受賞

「危険な道」(65) に出演中のときである。おかしい咳が気になって検査を受けたら肺癌と

の診断。手術が成功すると再びカメラの前に。さすがジョン・ウェイン！「エルダー兄弟」(65)「エル・ドラド」(66)などを精力的にこなして、次は全身全霊をかけて「グリーン・ベレー」に取り組む。長男のマイケル・ウェインが製作を担当。パパ・ウェインは監督（レイ・ケロックと共同）と主演。次男のパトリックが共演。家族ぐるみで本作に懸けた熱意が伝わる。時はベトナム戦争真っ最中。米軍の特殊精鋭部隊〈グリーン・ベレー〉の活躍を描く内容で、ウェインの愛国心とタカ派ぶりが話題に。

あの肺がんの手術から10年以上ものちの78年、今度は心臓に問題が発生、12時間に及ぶ大手術。それが成功したと思ったら次は胆嚢の手術が待っていた。そのとき胃に癌が発見されて、ただちに切除したあと、腸を使って作った胃を食道につなげるという恐ろしい手術に9時間半を耐えた。ところがリンパ組織の検査で、癌はもう全身に広がっていると分かり、どんな手術ももう無駄であるという病院側の結論が下された。

スクリーンでいつも不死身のヒーローを演じているウェイン、生身の本人も人間には負けない不死身の男だったが、病には勝てなかったのだと私がしみじみ思ったのは、その頃のことである。だが悪いことばかりではなく、長期にわたる入退院の繰り返しが始まる前に、彼は片目で大酒飲みの保安官に扮した「勇気ある追跡」(69)でアカデミー賞主演男優賞を受賞している。その授賞式に出席した彼がオスカーのブロンズ像を手に流した涙には、どのような思いがこめられていたのだろうか。遺作は「ラスト・シューティスト」(76)。末期癌を宣告された老ガンマン（ウェイン）が、再び銃をとって悪党一味に立ち向かう物語。まるでジョン・ウェインそのものの、男の壮絶な生きざまである。

病院のベッドで、モルヒネの静脈注射に痛みをやわらげられながら、昏睡と覚醒の繰り返しのなか、安らかに旅立ったのは、1979年6月11日。伝記本によると、テレビ放映のインタビューで「いい人生でしたか？」の問いに「すばらしかったよ」と答えている。今もこの言葉を思い出すたび、私の胸には熱いものがこみ上げてくる。

菅沼正子

～すてきなあなたへ～

## 今も輝くスター55 (7)

～ジェームス・ディーン～

青春の永遠のシンボル

愛を求め続けて

たら・なば、なんて意味のないことだが、ジェームス・ディーンがああとき24歳で死

ななかつたら……、ずっと演技の仕事が続けていたら……あのあとどんな俳優に成長していただろうか、と私はときどき考えることがある

1955年9月30日、主演第3作の「ジャイアンツ」(56)の撮影も数日前に終わり、サリナスで行われるオートレース出場のため、制限速度をはるかに超える猛スピードで、愛車ポルシェ・スパイダー550を駆っていたジミー。対向車線に現れたフォードの大型セダンと激突。首を折り、胸をステアリングコラムで強打して即死した。

主演作は3本しかないけれど、私がいちばん好きなのは「エデンの東」(54)。旧約聖書のカインとアベルの兄弟の物語を現代に置き替えたスタインベックの小説の映画化である。聖書ではカインは狩猟、アベルは農耕を仕事にしている。それぞれが神に捧げた収穫物のうち、神はアベルの供え物だけを受け入れたため、カインは怒ってアベルを殺してしまう。そのためカインは神の命令でエデンの東に追放されるという展開。だがスタインベックは兄をアロン、弟をキャルという双生児に置き替えている。品行方正な兄ばかりが父に愛され、自分はうとまれていることを悲しみ怒ったキャルは、アロンを殺したも同然の状態に追いやってしまう。そのキャルに扮したのがジミー、その演技のみごとさ！私はただただ感動であった。

この映画の時代背景は、アメリカが第1次世界大戦に参戦する1917年頃。兄弟の父アダムはカリフォルニア州サリナスで農場を営んでいるが、レタス輸送で大損害を被る。そんな父をなんとか助けたいと心痛めるキャル。そんな折に、参戦すれば大豆の値段が高騰するという大人の言葉を耳にする。そこでキャルは、今は父と別れ遠くに住む母から大金を借り、大豆を買い占め大儲け。その金を父への贈り物にするが「戦争で儲けた金など汚らわしい」と父は受け取ってくれない。つまりキャルは聖書の中のカインの立場に置かれたわけである。それでもなんとか父に受け取ってもらおうと、上目使いに父の体にしがみつくようにして、両手の札束を差し出すジミー。その演技は悲哀に満ちて、感動にあふれていたこと！なぜそんなに感動的だったのか、のちに彼の生い立ちを知ったとき、その謎が解けたような気がした。彼もまたキャルと同じように父の愛に飢え、それを欲しつつ少年時代を過ごした若者だったのである。

1931年2月8日、インディアナ州マリオン生まれ。父は歯科技工士、母は芸術をこよなく愛する女性で、幼児からジミーにバイオリンを習わせていた。ジミーが5歳のとき父の転勤で一家はカリフォルニアに移住、9歳のとき母ががんで死亡してしまう。そのためジミーは、インディアナ州に住む父の姉夫婦に預けられ、高校卒業まで過ごす。父のもとに呼び戻されたのは高校を出てすぐの19歳のとき。しかし父は4年前に再婚していて、ジミーはこの義母に容易に懐かなかったという。

### 女子高校生がファンクラブを

父の希望でカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の法学部に入ったものの、同時

に演劇コースにも身を置き、学生寮に入って演技への情熱が高まっていく。学生演劇で才能を見せ始めたジミーをスカウトしたのは、女性の敏腕エージェント。彼女の紹介でテレビドラマに出演するようになり、主役でもない彼に目をつけたのが女子高校生たち。彼女たちはファンクラブを立ち上げ、熱狂的な人気を広がっていく。彼は早くから女性の心をとらえる何かを持っていたようだ。

だがそのあと、最大のチャンスをもたらしたのは男性であった。生活のため CBS 放送の駐車場係をしていて知り合ったラジオ番組のディレクターである。やがてこの男性のマンションでともに暮らすようになり、彼のおかげで映画でも小さな役をもらえるようになる。この男性がニューヨーク転勤になると、ジミーもとも共にニューヨークへ。ジミーがバイ・セクシャルであったかどうかは分からないが、幼いうちに母を失い、高校を出るまで父の愛情から遠ざけられていたことを考えれば、それも有りそうな気がする。

### チャンスはニューヨークに

ニューヨークはジミーの才能を待ち構えていた。新しい女性のエージェントの奔走で、テレビに仕事をつかみ続けるうちに、舞台出演のチャンスが到来。その 2 作目の「背徳者」。新婚の若い考古学者の同性愛嗜好を見抜き、彼を背徳の世界へ誘い込む北アフリカの若者。それがジミーの役で、彼はみごとな誘惑者の視線で演じのけたのだ。この評判を聞いて「エデンの東」の脚本執筆にかかっていたポール・オズボーンは、エリア・カザン監督を誘い舞台を見た。2 人とも大いに気に入り、ジミーをキラル役に抜てきしたのである。「エデンの東」この 1 本でジミーの人気は一気に爆発、世界的に広がっていく。

続く第 2 作が「理由なき反抗」(55)。彼が演じたのは、家長としての権威を失った父親に、不信感や憤りを覚えながらも、なお父の愛情を求めずにいられない高校生。第 3 作「ジャイアンツ」(56) で演じたのはテキサスの大牧場で牧童として働く若者ジェット。ここには、父親の愛情を求める 10 代の飢餓感はないが、彼は牧場主が東部から連れ帰ってきた若妻レズリーに、ひそかに思いを寄せる。彼女に見せる上目使いの視線には、前 2 作の主人公と同様の孤独感と哀切感があふれていて、見る者の胸を熱くさせる。しかし、それから何十年かのちを描くドラマの終盤が問題。白髪まじりの年齢になってもまだ独身のジェットは、今や大富豪の石油王になっていながら、泥酔したあげく、なおも変わらぬレズリーへの愛をつぶやき続けている。その姿に私は共感を覚えることはなかった。

そこで、この文の書き出し「ジェームス・ディーンが今も生きていたら——」の設問に戻るわけだが、「ジャイアンツ」の終盤を見ればわかる通り、彼には老齢は似合わない。あのときは 24 歳で白髪まじりの男を演じさせられたのだから、ジミーがいかに演技派であろうとも、不自然さがつきまとうのは当然であっただろう。それにしても、成人して世間を知り尽くした男の役が適役だなんていうことは、彼にはありえないと私は思うのだ。人生の酸いも辛いも知り尽くした海千山千の男にはなっほしくないのだ。ジミーは反抗しているから

かっこいいのだ。

不謹慎かもしれないが、やはりジェームス・ディーンは、あのとき疾走するポルシェとともに、若い命を散らせてよかったのだ。あの若さでこの世を去ったからこそ、彼は、今も輝く青春の永遠のシンボルになりえたのだから。